

博士論文（要約）

山中湖村における集落空間の近代的変容と村落共同体の領域形成に関する研究
— 共同体の特徴を考慮した生活空間の計画論構築に向けて —

(A Study on the Modern Transformation of Settlement Spaces and the
Formation of Communal Territories in Yamanakako Village
— Toward the Development of a Theory of Living Space Planning in
Consideration of Community Features —)

福島秀哉

山中湖村における集落空間の近代の変容と村落共同体の領域形成に関する研究 -共同体的特徴を考慮した生活空間の計画論構築に向けて-

(A Study on the Modern Transformation of Settlement Spaces and the Formation of Communal Territories in Yamanakako Village
- Toward the Development of a Theory of Living Space Planning in Consideration of Community Features -)

本研究は、地域の主体性の再構築と、空間計画における協働による、固有性・多様性をもつ空間文化の創出に向けた、社会・空間的な共同体特徴を考慮した計画論構築への基礎的研究として、近世集落を母体に発展した山梨県南都留郡山中湖村の山中区、平野区、長池区の3区と、3区の母体となった山村である山中村、平野村、長池村の3か村を対象事例とし、集落形成から近代化、高度経済成長期における、村落共同体・生業・集落空間に関する歴史的分析、集落空間の変容に関する地理的分析、領域概念を用いた考察から、その社会・空間的な共同体の特徴を明らかにすることを目的とするものである。

第2章では、近世を通じて石高制・村請制という制度と各集落環境の条件下で、3か村の村落共同体が、農業生産に加えて複合的な副業・余業に従事しており、比較的生産性が高かった山稼ぎや駄賃稼ぎなどを中心に、その多くが山（入会山、共有地）の資源利用を前提としていたこと、さらに山の資源利用において村落共同体の成員となることが必要不可欠であったことを指摘し、その条件である屋敷地の所有の重要性について示した。そこから、近世3か村の村落共同体と集落空間に関する共同体的特徴として、村落共同体の社会的特徴、生業、土地利用の関係性における、屋敷地の所有の重要性を指摘した。

第3章では、明治維新後に中野村の3区となった旧3か村の村落共同体と、新たに誕生した外部計画主体である中野村、山梨県、民間開発事業者である富士山麓鉄道（現富士急行）に着目し、①外部計画主体による集落環境・集落空間の直接的な改変、②集落環境、生業の変化による村落共同体の変化を介した空間改変の、2つの観点から集落空間の変容について分析した。その結果、土地所有制度の変化や、外部計画主体による観光開発と交通網整備による集落空間の変化、養蚕業の発展や観光業への萌芽などの生業の変化は見られるものの、近世にみられた村落共同体と生業、および集落空間の関係の基本的な構造が維持されていたことを示した。

第4章では、戦後の広域交通網の変化や急速な観光地化の発展もたらした集落空間の改変、および村落共同体と生業の変化について整理した。その結果、山の利用の低下とともに、山における村落共同体内による資源利用や協働の必要性が低くなり、それと関連して生業に関わる共同体の機能が低下したことで、第2章、第3章において示した村落共同体と生業、および集落空間の関係の基本的な構造が変化したことを示した。またそれにともない村落共同体と集落空間に関する共同体的特徴としてあげた屋敷地の所有の重要性が低下したこと、並行して新規住民の参入などによる、居住領域の拡大が起きたことを指摘した。

第5章では、現代の土地登記簿の地番集成図と入手可能な公図により、3区3つの年代の土地利用図を作成し、3区の集落空間の変化について画地レベルで確認することで、字単位で把握していた集落空間の土地利用の特徴およびその変容について明らかにした。さらに、作成した土地利用図において、土地利用と画地形状の不変部分を抽出し、その特徴について考察を加えた。結果として、近世に屋敷地として名請されていたと考えられる画地の多くが、2015（平成27）年の土地利用図においてその土地利用と画地形状を維持していることを示した。また、区の地縁組織である組・隣保組、長池区のクミナイ、および同族組織であるイッケについて、その分布からみた空間上の特徴について考察を行った。地縁組織である組、隣保組が平野区において、地理的なまとまりを持っていないことなど、各区における村落共同体の集落空間上の特徴を明らかにした。また、同族組織であるイッケの分布について、山中区、平野区では、明快な空間

的特徴は見出せないものの、近世における土地移転が少なくなったことを指摘されている長池区において、イッケごとの土地所有のまとまりや、近世における出来事との関連を示唆する空間的特徴が残っていることを示した。

結章では、第2章から第5章の見解について整理した上で、村落共同体の成員条件としての土地所有に着目した領域形成の概念モデルとして「本拠領域」と「生業領域」を提示し、第2章から第4章における村落共同体と生業、および集落空間の関係について、その共同体的特徴としての領域の変容として考察を加えた。そこから、近世における村落共同体と生業、および集落空間における共同体的特徴であった本拠領域の存在が、生業における山の利用を基本とした関係性によって成立していたこと、および戦前までは関係性の構造とともに本拠領域が維持されていたこと、さらに戦後の観光開発、および生活、生業の変化によりその構造が変化し、集落内の居住領域における本拠領域としての意味が失われたこと（旧本拠領域）を示した。

また、現代に残る旧本拠領域の空間的特徴を詳細に把握するため、山中湖村の3区において、公図から現在の土地登記簿の地番集成図の画地形状および土地利用が変化していない画地のうち、最も古い公図において宅地であった箇所を抽出し、現在において読み取ることが可能な旧本拠領域として示した。さらに、現在でも区の住民によって主体的に継続されている祭事に関するルート、神社仏閣、道祖神、山中区、平野区における総本家（オオオーヤ）、長池区における年寄など家格の高い屋敷位置など、地域固有の民俗的事象を表す空間的特徴を重ね合わせた分析を行った。その結果、3区とも寺社仏閣、道祖神などの祭神はもとより、総本家（オオオーヤ）を含む多くの屋敷地において、現在でもその画地形態と土地利用が、現在の集落空間に内包されて残されていること、および地域住民が主体となって維持している祭事に関わる民俗的事象の多くが、旧本拠領域と重なっていることを示し、「現代の旧本拠領域における共同体と空間のつながり」を指摘した。

最後に、対象事例における社会・空間的な共同体的特徴として、山の資源利用を基礎とする「生業に関わる社会的なつながりも含めた屋敷地の所有についての重要性」である本拠領域と、山の利用低下によりその意味が失われた後の、「現代の旧本拠領域における共同体と空間のつながり」への歴史的推移を指摘し、その推移の把握と計画論への展開に向けた枠組みを示した。

本研究は、山梨県南都留郡山中湖村の山中区、平野区、長池区の3区と、3区の母体となった山村である山中村、平野村、長池村の3か村を対象事例とし、以下の成果を得た。

村落共同体と生業、および集落空間の変容に関する歴史的分析

- ・ 近世、明治から戦前まで、戦後から高度経済成長期までの各時代区分において、村落共同体と生業、および集落空間の変容に関する歴史的分析をおこない、その結果を関係図によって示した。
- ・ 生産性が高い副業・余業であった山稼ぎや駄賃稼ぎなどを支える山の資源利用において、村落共同体の成員となることが必要不可欠であったことを指摘し、その条件である屋敷地の所有の重要性について、村落共同体内の社会的関係の特徴も含めて示し、近世の村落共同体と集落空間に関する共同体的特徴として、村落共同体の社会的特徴、生業、土地利用の関係性における、屋敷地の所有の重要性を指摘した。
- ・ 戦後から高度経済成長期における、山の利用の低下とともに、山における村落共同体内による資源利用や協働の必要性が低くなり、それと関連して生業に関わる共同体の機能が低下し、近世から戦前まで維持されていた村落共同体と生業、および集落空間の関係性の基本的な構造が変化したことを示した

- ・ それにともない村落共同体と集落空間に関する共同体的特徴としてあげた屋敷地の所有の重要性が低下したことを指摘した。

集落空間の変容に関する地理的分析

- ・ 現代の地番集成図と入手可能な公図により土地利用図を作成し、3区の集落空間の変化について画地レベルで確認し、字単位で把握していた集落空間の土地利用の特徴およびその変容について明らかにした。
- ・ 土地利用と画地形状の不変部分を抽出し、近世に屋敷地として名請していたと考えられる宅地が立地する画地の多くが、2015（平成27）年の土地利用図においてその土地利用と画地形状を維持していることを示した。
- ・ 山中区、平野区の地縁組織である組・隣保組、長池区の組・クミナイ、および同族組織であるイッケについて、その分布からみた空間上の特徴について考察をおこない、近世における土地移転が少なかった長池区においては、イッケごとの土地所有のまとまりや、近世における出来事との関連を示唆する空間的特徴が現代でも維持されていることなどを示した。

領域概念の援用による考察

- ・ 「生業に関わる社会的なつながりも含めた屋敷地の所有について重要性」に着目した領域形成の概念モデルとして「本拠領域」と「生業領域」を提示し、村落共同体と生業、および集落空間の変容について、共同体的特徴としての領域の変容として示した。
- ・ 近世における村落共同体と生業、および集落空間における共同体的特徴であった本拠領域の存在が、生業における山の利用を基本とした関係性によって成立していたこと、戦前までは関係性の構造とともに本拠領域が維持されていたこと、戦後の観光開発、および生活、生業の変化によりその構造が変容し、集落内の居住領域における本拠領域としての意味が失われたこと（旧本拠領域）を示した。
- ・ 公図を用いた旧本拠領域の抽出から、3区とも寺社仏閣、道祖神などの祭神はもとより、総本家（オオオーヤ）を含む多くの屋敷地が、現在でもその画地形態と土地利用を残しており、現在の集落空間に内包されて残されていること、および地域の伝統的な祭事の行われる位置、範囲が旧本拠領域と重なっていることを示した。
- ・ 以上から、旧本拠領域における共同体と空間のつながりが、地域主体と空間の固有性、多様性に関わる社会・空間的な共同体的特徴として、現在においても維持されている可能性を指摘した。
- ・ 最後に、対象事例における社会・空間的な共同体的特徴として、山の資源利用を基礎とする「生業に関わる社会的なつながりも含めた屋敷地の所有についての重要性」である本拠領域と、山の利用低下によりその意味が失われた後の、「現代の旧本拠領域における共同体と空間のつながり」への歴史的推移を指摘し、その推移の把握と計画論への展開に向けた枠組みを示した。